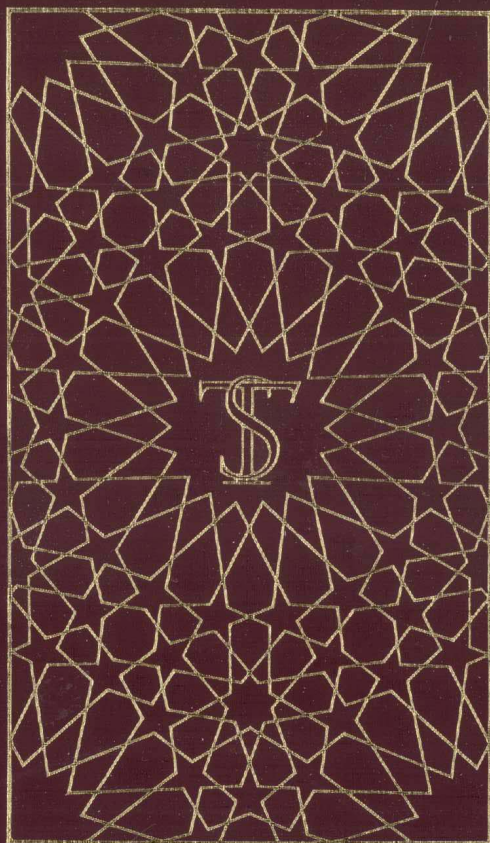




新編 ビブリオテク 澁澤龍彦
城と牢獄

一九八八年三月五日印刷
一九八八年三月二〇日発行

著者 © 澁澤龍彦

発行者 高橋孝彦

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

電話 営業部〇三(五)七八一一

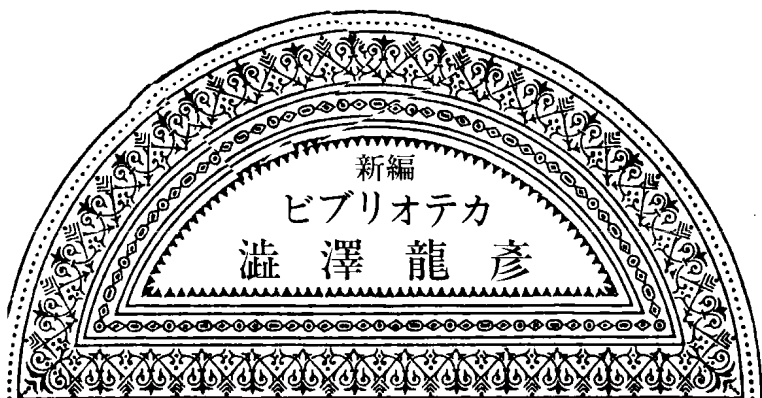
編集部〇三(五)七八二一

振替 東京九一三三二二八

郵便番号一〇一

理想社印刷・黒岩製本

ISBN 4-560-04538-0



装幀 野中ユリ

目 次

I

城と牢獄 10

サドの論理 22

サド侯爵とジャンヌ・テスタル事件 32

サドとマゾッホ 種村季弘『ザッヘル・マゾッホの世界』を読む 42

精子派としてのサド 54

フランス版『サド侯爵夫人』について 61

惑星の運行のように ルノー／パロー劇団『サド侯爵夫人』を見て 66

ラコスト訪問記 74

ラウラの幻影 79

II

ポルノグラフィーをめぐる断章 94

近親相姦、鏡のなかの千年王国 105

エレアのゼノンあるいはボルヘスの原理 111

『イタリア紀行』について 120

アリアドネの日記 125

ヴァルーナの鎖 129

一冊の本 コクトー『大膽びらき』 134

バイロスについて 138

ヴィスコンティ『家族の肖像』について 142

III

金魚鉢のなかの金魚 埴谷雄高について 148

稲垣足穂さんを悼む 160

美しい笑顔 瀧口修造さんを悼む 164

呉茂一さんの翻訳について 168

堀口大學氏の翻訳 171

思想の良導体 齋藤磯雄氏の翻訳について 175

超低空を飛ぶひと 川崎長太郎 180

不真目人間の栄光と悲惨 種村季弘『詐欺師の樂園』 181

観念の動物園『唐版犬狼都市』のために 184

加山又造あるいは豪華な禁欲主義 187

宝石のようなイメージ 野中ユリのこと 191

銅版画のマニエリスト 山本六三 194

潜在意識の虎『動物の謝肉祭』序 200

あとがき 203

解説（巖谷國士） 205

城と牢獄

城と牢獄

サド文学の逆説的性格を短い言葉で、しかも生き生きとしたイメージによって見事に表現した文章として、私がよく頭に思い浮かべるのは、アンドレ・ブルトンの推輓によって短篇集『機関手その他の短篇』（一九五三年）を出したジャン・フェリーという作家の、次のような散文詩あるいはアフリズムふうの文章である。すなわち、

「獄中のサド侯爵は、仕事の邪魔をされなくなかったので、独房の扉がびったり閉まっているかどうかを確かめに行った。扉は外部から二重の門で閉ざされていた。侯爵はさらに内部から、典獄の好意で取りつけてもらった掛金を下ろすと、さて安心して机の前にもどってきて坐り、ふたたび筆をとり出した。」

サド文学の逆説的性格というよりも、むしろこれは牢獄というものの逆説的性格を示したものだ、と言えるかもしれない。機関にあふれた文章である。サドはもちろん、旧制度の法律と義母の家族主義の犠牲者となって、不本意ながら苦しい獄中生活を送ることを余儀なくされたわけだったが、

結果的に考えれば、彼が選ばせられた情況は、彼が作家として生まれ変わるのに最も都合な、最も恵まれた環境だったのではないか、ということである。ジャン・フェリーの短い文章は、この逆説的な真実を一種の寓話のような形で、あざやかに形象化したものと考えてよいだろう。だから、サドが実際に典獄に頼んで、独房の扉に内側から掛金を取りつけたかどうかというようなことは、この際、問題にはならないのである。少なくとも記録には、そんなことはまったく出ていないということ念のために申し添えておこう。

牢獄が監禁の場所であると同時に、また夢想の場所でもあるという認識は、しかし、何もジャン・フェリーの発見になるものではない。それは牢獄文学のトポスの一つとして、おそらく古代以来、何度となく繰り返し語られてきたことであつたにちがいない。ただ、牢獄のテーマが強迫観念のように、作家たちの頭に取り憑き出したのは疑いもなく十八世紀末であり、ミシェル・フーコーが「大監禁」の時代と呼んだ一時代の、どうやらサドは象徴的人物となるべく運命づけられていたのだった。サドが『小説論』のなかで言及している同時代のイギリスの暗黒小説あるいはゴシック・ロマンスや、イタリアの銅版画家ピラネージの牢獄シリーズを傍らに置いて眺めるならば、いかに十八世紀末の鋭敏な感受性をもった芸術家たちが、いわば牢獄コンプレックスとでもいふべきものに取り憑かれていたかを理解するのは容易だろう。マルグリット・ユルスナールは「ピラネージの黒い脳髓」というエッセー（評論集『条件つきで』所収）のなかで、この間の事情を次のように的確に述べている。

「疑いもなく、ピラネージの牢獄は、十八世紀の最後の数十年間を生きるべきひとびとの精神を徐々に占有してゆく、あの監禁と拷問の強迫観念の最も先駆的な、最も神秘的な徴候の一つであろう。ここで私たちが思い出すのはサドであり、サドの作中のミルスキー（ママ）がその犠牲者たちを閉じこめる、フィレンツェの別荘の地下牢である。といっても、『ジュステイーヌ』の作者の残酷癖をピラネージが予告しているのではなく、サドとピラネージが二人ながら、いわばバロック的な権力意志の避けがたい帰結であるところの、あの権力濫用を表現しているということなのだ。」

サドが「大監禁」の時代の象徴的人物として、のちの十九世紀初頭のロマン派の作家たちの精神にまで、陰に陽に大きな影響を及ぼしつづけたのは、単に彼が旧制度の獄中で苦しい生活を送ったという事実によるためばかりではない。ユルスナールも述べているように、サドはその作中に、好んで犠牲者たちの呻吟する陰鬱な牢獄を描き出したのである。このいわゆるサドのサディズムを、ユルスナールは「バロック的な権力意志の癖けがたい帰結」と見ている。裏から眺めれば、それは牢獄コンプレックスということになるだろう。いずれにせよ、私が前に述べたサド文学の逆説的性質は、ここにも明らかに見てとれるはずである。すなわち、ヴァンセンヌやバステイーユからの妻宛ての手紙が証明するように、サドは現実には獄中に閉じこめられた、あわれな体制と権力の犠牲者にすぎなかったのに、その小説の世界では、逆にあらゆる権力を自由に行使する専制君主だったのだ。牢獄が夢想の場所でもあるということを、ここでふたたび強調しておく必要があるだろう。サドという一作家と、サドが生きた十八世紀末という時代との関係を、もっぱら監禁という見地

から、最も鋭い洞察力をもって定式化したのはミシェル・フーコーであろう。『狂気の歴史』の第三部第一章で、彼は次のように述べている。

「サディズムの出現は、一世紀以上も前から監禁され、沈黙を余儀なくされていた非理性が、もはや世界像としてでもなくイメージとしてでもなく、言説および欲望としてふたたび現われた時期と一致する。一人物の名前をもった個人的現象としてのサディズムが、監禁の中で監禁から生まれたのは偶然ではないし、さらにサドの全作品が、城砦、独房、地下室、修道院、近寄りがたい島などといった、いわば非理性にとって自然な場所を形づくるイメージによって支配されているのも偶然ではない。」

十八世紀末は、申すまでもなく理性の時代である。しかし理性の時代はまた、或る種のひとびとにとっては、専制主義の恐怖におびえながらも、その恐怖の魅惑を自分の側に取りこむことができた時代であったように思われる。フーコーの言う、言説および欲望として現われた非理性、城や牢獄のイメージによって支配されたサディズムとは、そのようなものであったにちがいない。サドやピラネージの例が示すごとく、それは専制主義の機関や武器を逆用したようなものだった、と言えは言えるであろう。かくて城砦や地下室や異端糾問へのオペレーションが、或る場合には、専制主義に対する反逆の目ざめ、自由の夢想にも通じるものとなるのである。

マルグリット・ユルスナールの文中にあるサドの作中人物ミルスキーというのは、おそらくミンスキーの誤りであろう。ミンスキーは『悪徳の栄え』に出てくるロシア生まれの一種の食人鬼、超

人的な能力と残酷趣味をもつ一種の巨人で、人里離れたアペニン山中の城に住み、みずから「アペニンの隠者」と称している。したがって、ユルスナールの文中にある「フィレンツェの別荘」というのも明らかに誤りだ。大臣サン・フォンの追及の手を逃れて、イタリアを放浪しているジュリエットの一行は、ふとしたことからミンスキーの知遇を得、その山中の城に招待されるのである。城には巨人の食用として、さらわれてきた女たちが多く幽閉されている。この部分は、アンドレ・ブルトンの『黒いユーモア選集』にも収録されているように、ややもすれば退屈になりがちな長大な『悪徳の栄え』のなかで最も生彩に富んだ、伝奇小説家としてのサドの想像力の最も自由奔放に羽ばたいた部分だと言ってよい。

女流批評家ベアトリス・ディディエは、この『悪徳の栄え』のなかのミンスキーの城に着目して、一般にサド文学における城が何を意味するかについて縦横に論じている（評論集『サド』所収「内部の城」一九七六年）。

たしかにサド文学における城のテーマは、容易に私たちの目につくところであるにもかかわらず、これまで誰によっても取り立てて論じられたことのなかったテーマであろう。中世以来の封建領主として、南仏のラコストにみずからの城をもち、少年時代から青年期あるいは中年期にいたるまで、しばしばここで読書三昧の生活を送ったり、芝居や大饗宴を催したり、さては少女たちを集めて秘密の快楽にふけったりしていた貴族サドの生涯にとって、城は切っても切れない重要な意味をもっていたはずである。その点では、平民出身の小説家レイフ・ド・ラ・ブルトンヌなどとは大いに

違っていた。またサドは囚人として、大革命以前のフランスで牢獄の役割を果たしていた、ヴァンセンヌやバステイーユやミオランをはじめとする、いくつかの名高い城に住むことを余儀なくされた。サドの牢獄は城だったのである。その小説作品においても、彼はミンスキーのアペニン山中の城に似た、法律の力の及ばない、悪人の住む孤絶した城を好んで描き出す。『美德の不運』には、ドーフイネ州の山中にある贖金づくりの一味の住む城が描かれている。『ソドム百二十日』の物語が展開される「黒い森」のなかのシリング城については、あらためて贅言を要すまい。

ミンスキーの城は、その周囲を水に取り巻かれた、湖中の島に位置しており、そこへ達するには小舟に乗らねばならぬ。島と言えば、十八世紀のユートピア小説において最も多く利用されるのが大洋中の「近寄りがたい島」であって、これについては前に引用したフーコーの文中にもある通りだ。しかしディディエの意見では、「城のテーマと島のテーマとは、その多くの共通点にもかかわらず、想像力にとつての意味がまるで違う。島はその補足的な要素とともに、水の夢想、つまり波のゆらめきとか、女性的な宇宙とかいったものを予想させるが、城はこれに反して、少なくともその空中に露出した面、外部に屹立した面において、本質的に男性的である」と。そしてミンスキーの城を取り巻く水には、こうした水の夢想を誘うようなものが何一つないのだ。この水は、単に城を法の支配した現実世界から隔絶させるための、堀の役目をしか果たしていないように思われる。

ここでちょっと注釈を加えておくが、私はディディエの意見に反して、必ずしもサド作品一般がそれほど島や水のテーマと無縁のものではあるまいと考えている。『アリーヌとヴァルクール』の